

風呂など特殊なものについての記述はあっても、銭湯の様式については何もふれられていなかった。人間の営みの中、生産に関するものはデータも得やすいが、生活（文化というべきか）に関する実態の把握は極めて困難である。蓋し生活地理学、文化地理学の発達のためだしい所以であろうか。

賤母本谷 — 続としよりのひやみず —

岡山 俊夫

地理学評論 6 巻 7 号「山崎直方博士記念論文集」所載「水準測量改測の結果と地形との関係」で私は、阿寺断層崖東部の断層階地塊が最近まで動いていたことを明らかにした。あれは実は、卒論の 1 章のサワリ的な部分を抜き出してまとめたものである。それから 27 年後の昭和 32 年秋、私ははじめて現地へ臨んだ。以来ほとんど毎年少くとも 1 回、多い年には 4 回、延長 80 km の同断層崖のどこかへ足を運んだ。主断層にそうては少くとも 2ヶ所で段丘が切られている。水準測量の結果にあらわれた階段断層（5万の地質図に記入なし）に手を伸したのは 39 年からである。その西部では破砕帯を簡単に発見できた。中部ではいまだにそれが見つからない。去年は木曾山脈系統の断層と交錯している東部へ鞍換えをした。根拠地は妻籠、コカ・コーラを売る店もない、古きよき時代の姿をとどめている宿場である。

中央線の名古屋行き列車で三留野を過ぎると、木曾谷は東西となり、満々と水を湛えた賤母のダムが見える。その南岸の急斜面は国道がトンネルとなる辺は谷底から山頂まで露岩の連続だが、その他は黒々と国有林におおわれている。そこに喰い込む狭深な谷が賤母谷で、木曾川との合流点はバックウォーターが入江になっているからすぐわかる。車窓観察と、2 km ほど下流の藪には驚かない私にも気味の悪いほどの森林の繁茂状態とから、永い間私はこの谷は入れないものと思っていた。

昨年 9 月、賤母谷源流部の荒廃しきった細径を辿っていて、はからずも賤母本谷歩道なるものの存在を知った。へたにくだり込んでエライ目に遭ってはと、廻れ右して国道づたいに木曾川との合流点まで行ってみた。たしかに径が、しかも右岸にも左岸にもある。翌日、その日は藤村の「夜明け前」の舞台馬籠へ行って阿寺主断層の東端部を見るつもりだったが、早発、源流部で見つけた密林中の賤母本谷歩道へ踏みこむ。これまたしばしば立往生するくらい部分的に甚しく荒廃しているが、高校生のころ詠んだ「うす湿る落葉の径はひとり行くわが登音さへ胸に泌むもの」という歌を思いださせて余りある趣があった。ただし、径は谷底から 100 m 以上の右岸を等高線なりに大迂曲をくり返しつつ、木曾川との合流点に近づいて急転直下し、露頭も景色も何も殆んど見えなかった。

11月、合流点から左岸の径にはいる。快晴なのに薄暮かと思える森林の繁りよりで、どこを歩いているのか見当がつかない。どうやら支谷へ踏み込んでしまったらしいが、よくわからぬ。確かに本谷と思ふ所まで戻って、藪をくぐり、谷底へ出、流れをさかのぼることにする。あちこちに腐って谷壁からずり落ちた木馬道の材木と倒木が、出水の際に流されて積み重なり、谷をとざす高さ2～3mの逆茂木となっている。所々に2～3段の滝があって、その中途に家ならば3階建ぐらいの大岩塊が突立っていたり、岩壁が両岸から巾2mに迫ったりして、なかなかスリリングである。破碎帯も数カ所で見えた。がそれよりも何よりも、賤母本谷の人気の無さ、その幽々莫々たる寂寥感・隔絶感にすっかり魅せられてしまった。

宿へ帰って訊ねられるままに、全然陽の射さないような谷ですよという、老齡の女主人が、賤母日影ということばがあったという。賤母山の山陰の木曾川ぞいの昔の路は、年中日のあたることなく、それでその部分をそう呼んだのだとのこと。木曾路の険阻さは今は僅かに「犬帰」の地名に偲ばれるだけだが、幽暗な賤母日影の面影はまだ多分に本谷に残っているのではなからうか。1日おいて私は、今度は源流部から左岸の歩道を下った。今年もまた行くつもりでいる。私の裡に生きつづけている原人の耳に、賤母本谷の呼ぶ声が聞えるから。

強 歩

幸 田 清 喜

ときどき強歩をやって、ひとり悦に入ることがある。月のある夜など千歳烏山の駅を降りると途端に空気がかくわしく、空がぬけるように澄んでいて心楽しいとき、強歩したい衝動にかられる。前方に若者が濶歩していると競争心がかきたてられる。誰かに追いぬけられると決定的に強歩体制にはいる。オリンピックで競歩に優勝して、ゴール前のフィールドへ飛びだした奥さんと抱擁して歓喜したあのイギリス青年の姿勢の真似である。上体を真直ぐに胸をはり、つまさきで地につくところへ踵を下し、息を小刻みに整えてテンポを速めるだけでよい。大地がスイスイ後ろへいく、黒い影が前へとぶ、めざす相手を抜き返したときの気持は悪くない。敵もさるもの、やられたと感付くことがあるらしくグイグイ迫ってくる場合がある。こんな時には早くうちへ着きたいと思う。途中で道をそれたらしく足音が小さくなるとヤレヤレと思う。玄関の扉をあけた途端に両足がひどくからみ合う。千鳥足のような振幅の大きいものでなく、早足で一直線上をいくあのものつれ方だ。努めて平静を装っていても大抵家内に見破られる。ところが実を言うと、その子供のようなと言われることが気に入って強歩が止められないのだ。コムラガエリを起しますよとも言う。しかし私には、長距離の強歩でもコムラガエリに関係がないようだ。数年前、黒姫の開発計画を手伝って信濃町に